

研究論文

ドイツ・ヴァイマル期におけるハンドボールの普及・発展に関する検討¹

波多腰 克 晃（スポーツ哲学研究室）²

Abstract

This study aims to clarify the way in which handball spread and grew during the period of the Weimar Republic. Ch. Eisenberg's statistical survey of sports in the Weimar Republic shows that sports prospered at that time, but does not identify handball. Nonetheless, Buichi Otani and E. Egger have shown that handball was well loved by a great many people. The present study therefore investigates the spread and growth of handball, which was not clarified by the statistical survey alone, from the historical perspective of the rivalry between *Turnen* and sport. As a result, handball is identified not just as a sport, but also as *Turnen*.

（受理日：2016年3月11日）

Keywords: Handball, Buichi Otani, Turnen, Deutsche Kampfspiele

キーワード：ハンドボール，大谷武一，トゥルネン，ドイツ競技大会

1. はじめに

本研究は，ドイツのヴァイマル期においてハンドボールがどのように普及・発展したのか明らかにすることを目的としている。Ch・アイゼンベルク(Ch.Eisenberg)によるヴァイマル期のスポーツに関する統計調査ではスポーツの隆盛が明らかにされているが，ハンドボールに関する調査が十分になされていない。大谷武一（以下，大谷と表記）によって指摘されているヴァイマル期のハンドボールの隆盛を検討することによって，ドイツ第二帝政期から続く「トゥルネン＝スポーツ抗争」

がもたらしたドイツにおけるスポーツの普及・発展をハンドボールに焦点を当てその内実について検討する。

Ch・アイゼンベルクの統計調査では明らかにされていないヴァイマル期のハンドボールの隆盛とは如何なる現象として捉えることが出来るのか。また，日本にハンドボールを普及させた大谷にとって，ドイツのハンドボールの普及・発展はどのように認識されていたのかという点から考察をする。これらの課題を明らかにすることによって，身体運動文化の定着にかかわる研究に一定の視座を与えることができるであろう。

¹ A study on the popularization and growth of handball during the Weimar Republic

² Hatakoshi Katsuaki, Sport Philosophy

2. ツルネン＝スポーツ抗争の概要

2.1 組織的対立

ドイツ固有の文化であるツルネンとイギリスから伝播した外来文化であるスポーツがそれぞれの覇権争いをしたことはスポーツ史上「ツルネン＝スポーツ抗争」と呼ばれる。

1868年にツルンフェラインの統一組織であるドイツ体操連盟（以下、DTと表記）はドイツ最大のツルネン運動推進母体として結成された。他方、その組織とはまったく別の過程で組織の成立を果たした種目別の団体にスポーツ連盟があった。19世紀半以降、イギリスから伝播した各種スポーツは次第に広まりを見せ、19世紀後半までには10種目の国内競技連盟を数えるに至る¹⁾。その種目別に組織された連盟は、国際競技連盟（IF）から末端のスポーツクラブにいたる統一組織、統一ルールをもっており、国際的に系列化された組織であった。

当時、国内で全一的支配を自認していたDTと種目別に統轄されていたスポーツ連盟は組織的対立を見るのである。ドイツではイギリスからスポーツが伝播したとき「最も抵抗したのは、ドイツにおける体育、すなわち、ツルネンと呼ばれる活動の提唱者たちであった」²⁾。その提唱者、DTを指すわけであるが、連盟に所属するツルナーはスポーツに対して「政治的経済的ヘゲモニー闘争におけるドイツの最大のライヴァルから送られた肌合わない輸入品」³⁾であるとして真っ向から非難する姿勢をとった。しかしながら、DTの意図に反してDTの会員はスポーツをするようになったため、DTはいくつかの競技はそれが行き過ぎでないかぎり容認するといった妥協もはかられたが、結局は「組織的で非競争的な集団体操の方を選び続けた」⁴⁾。

以上のように、DTはあくまでも自分たちのやり方を選ぶことによって組織を保持してきた。しかし、スポーツの流入は止むことなく、ドイツ全土へ広まり各種スポーツ連盟が結成されるに至っ

たのである。

2.2 理念的対立

理念的対立とは、ヤーン（F.L.Jahn）以来ドイツに生まれたツルネンに対して国外から輸入された、いわば新しい運動形態であるスポーツとの対立を指す。しかし、その対立はDTが苦難の末、創り上げてきたツルネンと対比させることによって「非ドイツ的な」スポーツの特徴を浮き彫りにした論争といえよう。したがって、ツルネンに対する直接的な批判は「過剰な『個性に対する組織的な高い評価』、『画一主義』、『アクロバット』、『上半身の筋肉育成』、『見せ物としての練習材料』、『社会的な団体の生活に対する陶醉』、そしてより多くのそのような非難である」⁵⁾と明言されている。他方スポーツに対する批判をツルネンの擁護者E・ノイエンドルフ（E.Neuenendorff）は、「一面性（Einseitigkeit）」、「全力投入（Voller Einsatz）」、「闘争意志（Wille zum Kampf）」⁶⁾の三点をあげている。「一面性」とはツルネンの「多面性（Allseitigkeit）」に對置されたスポーツ批判の常用語であり、走・跳・投などに専門分化した陸上競技が身体諸器官の部分的肥大と萎縮とを進行させる、という非難の意味が含まれている。そして、記録の追求が身体の部分的肥大につながる。さらに、記録の追求の結果として指輪がもたらされるというが、その他にもトロフィーや月桂樹などもスポーツの大会では授与されている。こうした賞金や物質主義的な側面もツルネン側から非難されていた⁷⁾。

「全力投入」については「やりすぎ（Übertreibung）」とも言われ、スポーツにおいて、健康状態を無視して疲労困憊するまで全精力を投入する傾向を指し、平均値を目標とするツルネンに對置された。そして、最後に指摘した「闘争意志」は、「いかなる状況下でも他人より秀でた成績で身体運動を行おうとする意志」と定義され、「競争（Wettkampf）」形式をとるスポーツと「国民同胞の同族意識、同権意識を育てる」ツルネンと

を対比するために用いられた。以上、E・ノイエンドルフの指摘であるが、以下に示すことも、論争の過程においてしばしば見受けられる。それは、服装についてである。「トゥルナーの団結、連帯が付け加わっておりトゥルネンをする機会があるときは青い運動着、グレーのズボンと帽子といった統一された服装」⁸⁾を選んでいた。そのため、スポーツに使われる服装は色とりどりのトリコットや半ズボンというスポーツの外面的なことをも批判していた。つまり、それは「道徳を破壊し行儀のわるいものだ」⁹⁾といい、また1901年のDTの年次報告では、「しかし、スポーツは名誉心の満足、外面的な成果だけに使われる限り、単なる悪ふざけだけでなく、若者をまじめな努力から引き離し、彼らの体力を価値のない、品位を汚す行動で浪費する手段と考えられる。」¹⁰⁾と報告している。

このようにスポーツ史上「トゥルネン＝スポーツ抗争」と呼ばれた組織的、理念的争いであったが、唐木が明言しているように「こうした論争の最大の特徴は、一方にとっての長所が他方にとっての短所とみなされ、二者択一論の不毛な論難」¹¹⁾になっていた。

3. ヴァイマル期のスポーツ

ドイツにみられたトゥルネン＝スポーツ抗争に関する研究は、主にK・レンナーツ(K.Lennartz)やA・クリューガー(A.Krüger)をはじめ多くのドイツ人研究者が言及しており、1923、24年の、いわゆるトゥルネン団体とスポーツ諸団体との純粋分離(Reinliche Scheidung)に至る経緯について解明されている。それらの研究成果の多くは、純粋分離を契機に伝統的形態から近代的形態へ、つまり、トゥルネンからスポーツへという身体的な文化の歴史を単線的な「スポーツ化」の過程として捉えている。しかし、Ch・アイゼンベルク(Ch.Eisenberg)によって著された『English Sports' und deutsche Bürger. Eine Ge-

sellschaftsgeschichte 1800-1939』では、多様な地理的・文化的起源をもつ身体的な文化として「トゥルネン＝スポーツ抗争」について系譜学的に論じている。そうした文化の多様性を鑑みるならば、純粋分離をもって一括りにトゥルネンという文化形態はイギリスから持ち込まれた新たな文化形態に飲み込まれたとする視点によって、果たしてドイツにおけるスポーツ文化の定着を解明できるのだろうか。

ところで、Ch・アイゼンベルクはヴァイマル期におけるスポーツに関する統計調査を行い¹²⁾、これまでヴァイマル期のスポーツ統計調査研究において利用された当時の統計資料を再検討し、ヴァイマル期に全盛期を迎えたスポーツを主に所属団体、会員の増加傾向、会員の政治政党との関係、世代・性別、職と社会階層別に解明している。また、スポーツがすでに第一次世界大戦の過程において急速に普及・発展を遂げたことについて言及している。これはドイツに限ることではなく、ヨーロッパ全体やアメリカにおいても同様であった¹³⁾。このことは、スポーツの隆盛がヴァイマル期の他の文化と同様に発展を遂げたというだけではなく、すでにその下地になる萌芽的要素をもっていたとみるべきであろう。とすれば、純粋分離を契機に大幅な会員を流出させたとはいえ、ドイツ第二帝政期に隆盛をみせたDTの存在を踏まえた上で、ヴァイマル期のスポーツの発展・普及について言及されなければならないはずである。

そこで、ドイツにとって外来の文化であるハンドボールに注目した場合、当然のことながら、ハンドボールは、従来までの「トゥルネン＝スポーツ抗争」研究に立脚すれば、受け入れがたい勝利至上主義の要素を多分に含む競技として捉えることができ、トゥルネン団体とは理念的に対立するスポーツ種目である。それにもかかわらず、Ch・アイゼンベルクも指摘するように、ハンドボールはドイツにおいて急速に人気を集めることになる。次節ではDRA主催のドイツ競技大会においてハンドボールがどのように位置づけられていた

のか検討する¹⁴⁾。

4. ドイツ競技大会にみられるハンドボールの位置づけ

4.1 オリンピックの代用としてのドイツ競技大会

1912年ストックホルムで開催されたIOC会議で、第6回オリンピック競技大会ベルリン大会の開催が決定され、ドイツ国内ではオリンピック参加のためのドイツ帝国委員会(Deutscher Reichsausschuß für Olympische Spiele, 以下 DRAfOS と表記)を中心に大会開催にむけて力を注いだ。しかし、1914年8月1日ドイツの対ロシア宣戦布告、3日、対フランス宣戦布告、ドイツ軍のベルギー侵入と続き、ドイツは第一次世界大戦に突入した。それにともなって、第6回オリンピック競技大会は中止を余儀なくされた。短期戦と思われていたこの戦争は長期化し、国民生活全体を巻き込む総力戦となったが、1918年ドイツの敗戦によって幕を閉じた。

戦後ドイツはオリンピック競技大会への参加を認められず、その後参加が認められるには1928年アムステルダム大会をまたなければならなかった。こうした経緯から、1922年第1回ドイツ競技大会は“オリンピックの代用”として開催されたという認識が一般的であった^{15, 16, 17)}。

ところで、1916年第6回オリンピック競技大会ベルリン大会の中止が決定されると、DRAfOSのメンバーはドイツ競技大会開催にむけて引き続き取り組んだ。しかし、ドイツのオリンピック競技大会への参加が認められない状況下においてこれ以上 DRAfOS という名称は時代に適さない表記であり、名称変更の準備が進められた。会議ではいくつか案が提案されたが、最終的には1917年2月の会議において身体運動のためのドイツ帝国委員会(Deutscher Reichsausschuß für Leibesübungen, 以下 DRA と表記)という名称に変更された。これを受けて、オリンピック競技大会参加のための委員会から身体運動の全領域を包括的に管理し

ていくための委員会へとなった¹⁸⁾。つまり、このとき DRA の最大の目標がドイツ競技大会の開催へとむけられたのであった¹⁹⁾。その後、1919年5月15日の DRA 総会ではドイツ競技大会の開催プログラムの草案がまとめられ、最終的には1921年6月に第1回ドイツ競技大会開催プログラムが公示された。1922年5月25日の大会のメイン・イベントの前日に DT による競技種目として示されていたハンドボール女子の決勝戦が開催された。その他、徒手体操と歩行演技、児童・生徒による競技、女子共同演技、民族ダンスなどが実施された。これらの競技は宣伝競技として開催された²⁰⁾。

4.2 ドイツ競技大会とハンドボール選手権大会

メイン・イベントの開催は唯一 DRA によって企画運営された開催であり、すべての競技大会関係者を集結させた。まず参加者による競技場への行進²¹⁾、レヴァルト次官²²⁾による演説、さらにハンドボールの決勝戦が予定された。その他4千人による自由演技に加えて生徒らによるライターバル、トライプバル、ヴェットヴァンダーバル、バーラウフ、ハルトウングス演技を紹介し、女性によるシュヴェヴェバルカン、高齢者によるトゥルネン、シュロイダーバルチーム競技、平行棒、多彩な民族ダンスを実演した²³⁾。ハンドボール選手権大会の決勝戦は、TuS1860 シュパンダウ対 TuRa デュッセルドルフの決戦となり、3対0でシュパンダウチームが勝利した²⁴⁾。祝祭日は2万から2万5千人の観客に見守られ、最終的にトゥルネン競技ならびにハンドボールチームの勝者を表彰して幕を閉じた²⁵⁾。

以上のように1922年第1回ドイツ競技大会は結果的には各種スポーツ連盟の管轄下において開催され、メイン・イベントの日は DRA 主催のトゥルネンの演技を中心に開催された。いわゆる近代オリンピック競技大会のように最高記録を求めた各種選手権大会が中心となった競技大会であった。特に、陸上競技と水泳競技では多くの高記録

が打ち立てられ、その記録は国際成績と比較した場合、その記録をも上回っていたほどであった²⁶⁾。しかし、他方でメイン・イベントを祝祭日と名づけ、祝祭日の閉幕式および競技大会の閉幕式においてレヴァルトはその演説の中でこの大会を「祝祭」として位置づけている²⁷⁾。このことは、ドイツ競技連盟が戦前において DRAfOS と対立してきた重要な意味を持っている。つまり、国民的祝祭としてのドイツ国内オリンピック競技大会 (Deutsche Kampfspiele als Nationalfest) を推進したドイツ競技連盟 (Deutscher Kampfbund) と国際的な近代オリンピック競技大会への参加を目指す DRAfOS との理念的な相違であった。その両者が戦後共同で開催した競技大会であることを踏まえるならば、レヴァルトの演説やトゥルネンの上演日を祝祭日と名づけたように、1922 年第 1 回ドイツ競技大会は国民的祝祭としての役割をも担っていたといえよう。また、一方では各種スポーツ連盟が目論む種目別競技大会としての大会であったが、他方トゥルネンの競争を伴わない生徒らによる自由演技や合唱、芸術コンクール、ドイツ的な競技 (ライターバル、トライプバル、バーラウフなど) を取り入れることによって両者の理念を含んだ大会であった²⁸⁾。

以上指摘した点を踏まえると、ハンドボール選手権大会は DRA 主催のメイン・イベントの日に実施され、多くの観衆を前に催されている。Ch・Eisenberg の統計調査では明らかにしえなかったハンドボールの普及・発展を 1922 年第 1 回ドイツ競技大会にみると、そこにはトゥルネン団体の競技種目としてのハンドボール競技として位置づけることができるのである。

5. ドイツのハンドボールの隆盛と大谷武一

大谷は文部省留学生として渡米 (1917 年から 1921 年) し、その帰途、欧米諸国を視察した。その内容は主に『大谷武一大谷体育書選集 I から IV 及び別冊』において著されている。ここでは、大谷によって指摘されたドイツにおけるハンド

ボールに関する記述を抽出し、検討する。

さて、大谷は帰国後の 1922 年、大日本体育学会体育夏期講習においてハンドボールを紹介している。1938 年には日本ハンドボール協会を設立し、副会長に就任している。ハンドボールは北欧を中心として広まりをみせ、ドイツにも普及していった。大谷が日本に広めようとしたハンドボールとはいかなる競技特性を持ち合わせていたのだろうか。また、先述した、ヴァイマル期に普及・発展を遂げたハンドボールを大谷はどのように捉えていたのだろうか。大谷の指摘によると、ハンドボールの普及にはサッカーの普及と関わりをもって説明されている。

ドイツで、英国式のスポーツ形式をそのまま採用しているものに蹴球がある。蹴球は、二十二人の者が二人のゴールキーパーを除けば、全部が各自の力量に応じて十分活動出来るので、多数者に対する体育形式としては都合がよい²⁹⁾。

競技としてサッカーを捉えている。大谷は、ドイツは「総てを合理的に考え、しかもその考えた通りに実行し、目的にかなったもの」³⁰⁾ はたとえ外来文化のサッカーであっても受け入れるが、「目的にかなわないものは、どんなに面白く、一般の人氣に投じそうなものでも、一切採用しない方針をとり」³¹⁾、人気種目のサッカーにもトゥルネンの理念を求めている様子を指摘しているのである。しかし、こうした態度で外来文化のスポーツを検討すると、この要求に応ずるものが少ないので、ドイツでは、実際の要求に応ずる体育法を案出している³²⁾。すなわち、ここにサッカーとハンドボールの関わりを読み取ることができるのである。

ハンドボールは秋から冬にかけて最も盛んに活動されている。ハンドボールには、サッカーの長所のほかに、更に臂が使用されるので、一層体育的だといえるのである³³⁾。

大谷の留学の帰途にみた 1920 年代のハンドボールの普及の様子とその後再度訪れたベルリン

におけるハンドボールの普及・発展の様子を次のように指摘している。

十数年前、自分が第一次の外遊の際、ベルリン郊外で創めたばかりのところを見たが、まだその技術は幼稚なもので、その後の発展を疑われたものであったが、昨年訪ねて見ると、到るところで盛大に行われており、しかも、その技術において、協同動作において、非常な進歩を遂げているのを見た。少年・婦人・壮年者・老年者等の間で幾つもの試合が到るところで行われている壮観を面白く見た。陸上競技の連中が、シーズンから離れている間、次のシーズンまで身体の状態を維持し、且つ出来ればさらに向上しようというので、この手球の選手権協議開催の権利を陸上競技協会がもっているのであるが、これによって見ても、ドイツの運動家が、同時に体育に深甚な考慮を払っている態度がうなづかれようと思う。先に体育とスポーツは別だと述べたが、実際になると、スポーツマンがスポーツに成功するためには、体育の力をからねばならないし、また体育にスポーツの要素を入れないと、体育としても成功し難いものである。この点については、他日改めて論じて見たいと思っている。ここで誤解を防ぐために一寸断っておくが、それは各国は、夫々、国状を異にしているのであるから、ドイツ流の体育スポーツ政策を、そのまま、わが国でも採用しようというのでは勿論ないということである³⁴⁾。

サッカー選手や陸上選手はシーズンを離れるとトレーニングの一貫としてハンドボールを実施していた。たとえば、日本でも体操学校（現在の日本体育大学）ではラグビー部に所属している選手がハンドボール部を結成し、1937年第9回明治神宮体育大会に出場している経緯からしても、ハンドボール競技にはサッカーやラグビーと同様の競技特性を窺い知ることができる³⁵⁾。そして、何より、ここで確認されるべきは、ハンドボールというスポーツ種目を、サッカーやバスケット

ボールなどよりも、ずっと体育的であり、教育的な球技であるのであるから、将来、わが国で盛んにおこなわれるようにしたい³⁶⁾、と言及しているように、イギリス発のスポーツのように気晴らしとしてスポーツを実施するのではなく、教育的視点に基づいて実施しようとするドイツのスポーツ受容である。この教育的視点こそがドイツ第二帝政期から続く、トゥルネンの理念的立場に他ならないのである。大谷は以下のように述べている。

ドイツでは、外国人がやろうとやるまいとそんなことは頓着せず、自分達で良いと思ったことはどしどし実行する。ドイツ人のもっている、指導者の指導精神に従って、わき目もふらずに進んで行く、国民協同一致の精神は感心なものだと思う。外国流の名前がつかなければ、値うちがないかのように考える西洋崇拝の思想が、わが体育スポーツ界に、今だに相当さかんなのは甚だ遺憾であるといわねばならぬ。この点だけは、是非ともドイツ国民の気風に学びたい。（中略：括弧内引用者）ドイツではスポーツを、スポーツとして楽しむような、のんきな気分はどこにも見当たらない。大人も子供も、まったく真剣な態度でスポーツをやっているように見える³⁷⁾。

以上のようにヴァイマル期に普及・発展したハンドボールを大谷の指摘によって確認することができると同時に、その普及・発展過程は先述したように、単純な歴史的発展史観に基づいたものではなく、複雑な変遷の中に文化定着の過程を読み取ることができるのである。

6. 結びにかえて

本研究は、ドイツ・ヴァイマル期においてハンドボールがどのように普及・発展したのか明らかにするために、主に「トゥルネン＝スポーツ抗争」研究の視点から考察することによって、身体運動文化の定着の一端を明らかにしようと試みた。大

谷のドイツ滞在時に確認された当時のハンドボールの様子やドイツ競技大会にみられたハンドボール競技の位置づけは、単にハンドボールをスポーツとして捉えるのではなく、むしろ、ドイツ第二帝政期から続くドイツ固有の文化であるトゥルネンの要素を継承する形で普及・発展していることが確認できた。このことは、「トゥルネン＝スポーツ抗争」研究の新たな視点として捉えることができる。すなわち、従来までの「論争の最大の特徴は、一方にとっての長所が他方にとっての短所とみなされ、二者択一論の不毛な論難」という帰結ではなく、文化の「融合の過程」として捉えるための視座を与えたことになる。

しかしながら、今回の分析をより詳細に検討することによってドイツ全土にわたってどのように普及・発展したのか、また、その際スポーツクラブ単位でどのような方法が用いられたのかさらなる検討の必要がある。今後の課題としたい。

注及び引用参考文献

- 1) アレン・グットマン：谷川稔他訳（1997）スポーツと帝国，昭和堂，p. 167
- 2) 成田十次郎（2002）ドイツ体育連盟の発展，近代ドイツスポーツ史Ⅲ，不昧堂，pp. 211-212
- 3) 前掲書，グットマン，p. 168
- 4) Langenfeld,H.（1986）Von der Turngemeindes zum, modernen Sportverein, Stationen auf dem 175 jährigen Weg von Jahn bis Weyer, In：A. Gunter, Pilz（Hrsg.）, Sport und Verein, Reibeck bei Hamburg, S. 23-24
- 5) Ebenda, S. 19-20
- 6) Ebenda, S. 18
- 7) 高津勝（1996）現代ドイツスポーツ史序説，創文企画，p. 250
- 8) ハンス・ウルリヒ・ヴェーラー：大野英二他訳（1983），ドイツ帝国，未来社，p. 57
- 9) 前掲書，高津，p. 252
- 10) 前掲書，p. 253
- 11) 前掲書，p. 254
- 12) Eisenberg,Ch.（1993）Massensport in der Weimarer Republik. Ein statistischer Überblick,Archiv für Sozialgeschichte,33,S.137-177
- 13) Ebenda,Eisenberg,Ch.,S.138
- 14) ドイツトゥルナー連盟の活動的なハンドボール選手やテニス選手はたとえばスポーツに分類されなかった。なぜなら，その統計は彼らを個別に示していなかったからである。Ebenda,Eisenberg,Ch.,S.145. さらに女性のホッケー，テニス選手は，ちょうど20,000弱の女性がDFBの代表になっており，その代表はその他にも陸上競技の領域と第一次大戦中に考案されそれ以来急速に人気を集めたハンドボールにも貢献した。Ebenda, Eisenberg, Ch., S.161
- 15) Vgl., Ausschreibungen Deutsche Kampfspiele zu Berlin
- 16) Beckmanns,（1933）Sport-Lexikon,Leipzig-Wien 1
- 17) Der Sportbrokhaus（1971）Alles vom Sport von A-Z, Wiesbaden
- 18) Peterman,A.（1969）Sportlexikon,Köln
- 19) Vgl., Stadion-Kalender,3,4,5, 1917 Nr. 2, S. 31
- 20) Ebenda,Ausschreibungen
- 21) ドイツ競技大会は諸外国に在住しているドイツ人も招待された。たとえば，ベーメン地方（現在のプラハ地方），オーストリア，ダンツィヒ（ポーランドの都市），チェコ，スロバキア，スイス，スペイン，チリ，アルゼンチン。Vgl.,Diem,C.（1922）Deutsche Kampfspiele, Berlin, S.28
- 22) Theodor Lewald（1860-1947）医学，法学博士であるテオドール・レヴァルトはプロイセン内務省に所属し，その間（1891-1921）多くの外国へ代表派遣された。たとえば，国際的な大きな博覧会であった1893年シカゴ，1900年パリ，1904年にドイツ代表として派遣され

ている。その後 1919 年には省内の次官に任命された。1921 年以降は一時的に仮の退職となったが、すぐにジュネーブ協約に基づいてオーバーシュレーゲン副全権使節に任命された。戦後 DRA の臨時役員として DRA の仕事に携わっていた。Vgl., Krüger, A. (1975) Theodor Lewald, Sportführer ins Dritte Reich, Berlin/München

²³⁾ Stadion 9, 1921 30. Mai 1921, Nr. 60, S. 1

²⁴⁾ Vgl., Ebenda

²⁵⁾ Vgl., Ebenda

²⁶⁾ Vgl., Ebenda

²⁷⁾ Vgl., Ebenda, Diem, C., S. 47-53

²⁸⁾ Vgl., Ebenda, S. 279

²⁹⁾ 大谷 (1960) 大谷武一体育書選集Ⅲ, 杏林書院, p. 183

³⁰⁾ 前掲書, p. 183

³¹⁾ 前掲書, pp. 183-184

³²⁾ 前掲書, p. 184

³³⁾ 前掲書, p. 183

³⁴⁾ 前掲書, p. 184

³⁵⁾ 日本体育大学ラグビー部史編集委員会編著 (1987) チャンスの像とともに 日体ラグビー八十余年の歩み, 不昧堂, p. 158

³⁶⁾ 前掲書, 大谷, p. 286

³⁷⁾ 前掲書, 大谷, pp. 287-290